

【論 文】

スクールソーシャルワーカーを選択する 社会福祉士・精神保健福祉士の傾向 —就労状況調査を用いた属性と価値の横断的分析—

藤本 啓寛*

要旨：本論文は、スクールソーシャルワーカー（SSWr）を選択する社会福祉士・精神保健福祉士にはどのような傾向があるのかについて明らかにするものである。そのために、公益財団法人社会福祉振興・試験センターが2020年に実施した「令和2年度社会福祉士・介護福祉士・精神保健福祉士就労状況調査」のうち社会福祉士・精神保健福祉士についての集計データを二次分析した。その結果、非正規雇用の選択は、女性であるという性別や高齢であることが関連を有している一方で、非正規雇用内でのSSWrの選択は、性別や年齢は非常に弱い関連しかないことが明らかにされた。また、社会福祉士のみについて、SSWrの選択は他職種に比べて職務内容に魅力を感じているからであることが明らかにされた。以上から、SSWrを選択する者は他の非正規雇用と類似した属性を有しながらも、正規雇用の他職種に近い価値を有した者が多いという不整合を示した。

Key Words: 社会福祉士, 精神保健福祉士, 就労状況調査, 非正規雇用, 職務内容の魅力

1. 問題の所在と先行研究の検討

社会福祉士・精神保健福祉士を有していることで選択できる職業の幅は広い。「令和2年度社会福祉士・介護福祉士・精神保健福祉士就労状況調査（以下、「就労状況調査」と略記）」では、社会福祉士・精神保健福祉士の就労先として、高齢者福祉、障害者福祉、児童・母子福祉、生活保護関係、地域福祉、生活困窮者自立支援関係、医療関係、学校教育関係、就業支援関係、司法関係、行政機関と、実に多様な領域が挙げられている。また職種としても、相談員、支援員、指導員といった複数の職域にまたがるものから、医療ソーシャルワーカー、スクールソーシャルワーカー（以下、SSWrと略記）といった特定の職域にしか存在しないものまで多様である。

では、社会福祉士・精神保健福祉士の職業選択に影響を与えている要因はなんだろうか。本論文では、多様な職業の中からSSWrを選択する者の傾向に着目する。SSWrは、2008年度のSSWr調査研究委託事業（2009年度からSSWr活用事業）により全国に広がった社会福祉士・精神保健福祉士の新しい職業である。様々な職業の中でも、本論文がSSWrを選択する者に着目するのは、先行研究に照らして次の学術的・実践的意義があるからである。

第一に、先行研究は社会福祉士・精神保健福祉士の職業選択に十分着目してこなかったからで

2023年3月27日受付／2023年9月11日受理

* 早稲田大学

ある。これまでの社会福祉学研究では、医療ソーシャルワーカーといった特定の職種に身を置いた後の成長に焦点化されてきた（保正 2013）。しかし、どのような者がどのような職業を選択しているのかといった成長以前の職業選択は、2022年にソーシャルワーク教育学校連盟が国家試験の模擬試験受験者に進路意向についてのアンケートを実施した程度（日本ソーシャルワーク教育学校連盟 2022）であり、ほとんど等閑視されてきた。

先行研究が少ないなかでも参考になるのは、鷲谷善教・浦部史・真田是らによって提唱された社会福祉労働論を継承した研究である。これらの研究は、2000年代以降、実証的な調査によって社会福祉労働の低賃金を問題化しており（義基 2022）、こうした知見から低賃金による離職、より高賃金の職場への転職が想起されうる。しかし、マルクス主義的知識と親和的な社会福祉労働論は、その説明枠組みの力点が経済的抑圧と労働者の団結に置かれ、それ以外の側面は十分に考慮されてこなかった。すなわち、ほとんどが他職に比べて相対的に不利な労働条件である非正規職として成立したSSWrの選択は、社会福祉労働論の枠組みでは説明できないし、そもそも社会福祉労働を通じて自らの厳しい待遇を自覚しても、「連帯」や「労働」に至らず転職する社会福祉労働者は理論的“無”関心のもとで見過ごされてきたのである。一般に職業選択においては、労働条件だけではなく、職務内容そのものも考慮されると考えられる。SSWrへの着目は、これまでの先行研究では説明されえなかった職業選択を、労働条件だけではなく職務内容も含めて包括的に検討しようという社会福祉学研究上の学術的意義を有しているといえる。

第二に、新たな職域に挑戦する社会福祉士・精神保健福祉士の傾向を解明できるという実践的意義があるからである。就労する者が多い高齢者福祉や障害者福祉といった職域では、前職の経験を生かして同じ職域の別の職種に挑戦することが可能である。しかしSSWrのフィールドとなる学校教育は、これまで社会福祉士・精神保健福祉士の資格を生かして活躍できる職業がほとんどなかった職域である。そうした職域に果敢に挑戦する者の傾向を明らかにすることは、職域の拡大を呼び掛けている日本社会福祉士会・日本精神保健福祉士協会といった職能団体の努力（白旗 2015）が、どのような社会福祉士・精神保健福祉士に響いているのかを検証することにつながるという実践的意義を有している。

そこで本論文では、SSWrを選択する社会福祉士・精神保健福祉士にはどのような傾向があるのかについて、他職種と横断的に比較を行って明らかにすることを目的とする。

II. 仮説の設定

1. 仮説①：仕事と家庭の都合とを両立する女性という属性

本論文の問いに対し、2つの仮説が立てられる。1つ目の仮説は属性からの説明である。すなわち、「SSWrを選択する社会福祉士・精神保健福祉士は、仕事と家庭の都合とを両立したい女性が多い」である。

SSWr活用事業を行っている61自治体・131人のSSWrに質問紙を配布した山野（2012）からは、SSWrの61.8%が女性であったこと、また20歳代のSSWrが6.9%と少なく、60歳代（28.2%）まで年齢帯が上がるに連れて増えていることがわかる。以上の偏りは、非正規雇用がほとんどであるSSWrが、フルタイムの仕事に取り組む男性ならびに結婚・出産前の若年女性にとっては役不足の仕事として受け止められやすい一方で、結婚・出産後の女性には、家庭の都合と両立しやすい手ごろな仕事として選ばれやすいからであると解釈できる。

表 1 非正規雇用で働く理由（総務省統計局 (2020) より筆者作成）

	総数	家庭の事情							
		①自分の都合のよい時間に働きたいから	②・③の総和	②家計の補助・学費等を得たいから	③家事・育児・介護等と両立しやすいから	④通勤時間が短いから	⑤専門的な技能等をいかせるから	⑥正規の職員・従業員の仕事がないから	⑦その他
総数	665	186	84	77	7	27	78	112	135
	100.0%	28.0%	12.6%	11.6%	1.1%	4.1%	11.7%	16.8%	20.3%
15～24歳	129	63	26	26	0	6	4	7	17
	100.0%	48.8%	20.2%	20.2%	0.0%	4.7%	3.1%	5.4%	13.2%
25～34歳	81	21	4	4	0	3	6	20	21
	100.0%	25.9%	4.9%	4.9%	0.0%	3.7%	7.4%	24.7%	25.9%
35～44歳	59	13	2	1	1	2	6	16	15
	100.0%	22.0%	3.4%	1.7%	1.7%	3.4%	10.2%	27.1%	25.4%
45～54歳	59	11	2	1	1	2	6	20	12
	100.0%	18.6%	3.4%	1.7%	1.7%	3.4%	10.2%	33.9%	20.3%
55～64歳	135	21	16	14	2	5	20	28	33
	100.0%	15.6%	11.9%	10.4%	1.5%	3.7%	14.8%	20.7%	24.4%
65歳以上	203	58	33	31	2	7	36	21	36
	100.0%	28.9%	16.3%	15.3%	1.0%	3.4%	17.7%	10.3%	17.7%
総数	1425	433	549	317	232	68	81	118	125
	100.0%	30.4%	38.5%	22.2%	16.3%	4.8%	5.7%	8.3%	8.8%
15～24歳	140	66	34	31	3	7	5	7	16
	100.0%	47.1%	24.3%	22.1%	2.1%	5.0%	3.6%	5.0%	11.4%
25～34歳	163	43	59	22	37	7	9	20	20
	100.0%	26.4%	36.2%	13.5%	22.7%	4.3%	5.5%	12.3%	12.3%
35～44歳	273	65	139	56	83	9	13	22	17
	100.0%	23.8%	50.9%	20.5%	30.4%	3.3%	4.8%	8.1%	6.2%
45～54歳	371	100	167	104	63	16	18	35	23
	100.0%	27.0%	45.0%	28.0%	17.0%	4.3%	4.9%	9.4%	6.2%
55～64歳	292	91	103	67	36	14	21	25	26
	100.0%	31.2%	35.3%	22.9%	12.3%	4.8%	7.2%	8.6%	8.9%
65歳以上	187	68	49	38	11	13	15	9	22
	100.0%	36.4%	26.2%	20.3%	5.9%	7.0%	8.0%	4.8%	11.8%

表 1 は、社会福祉士・精神保健福祉士に限らない非正規雇用で働く者に対し、その理由を択一式で尋ねた結果である。女性は、男性に比べて「②家計の補助・学費等を得たいから (22.2%)」、 「③家事・育児・介護等と両立しやすいから (16.3%)」を選択する者が多く、これらの総和は 44 歳まで年齢帯が上がるにつれ高くなっている。なお 45 歳以降家庭の都合との両立 (②・③) を選択する者の割合は下がり、代わりに「①自分の都合の良い時間に働きたいから」を選択する者が増えるが、これは「自発的な意思」というよりも、扶養控除内での労働を選択するといった経済的な事情でやむを得ずを選択された可能性があることが指摘されている (岸上 2021)。こうした事情がもし SSWr にも当てはまるとすれば、結婚や出産、育児といった加齢と共に訪れるライフイベントを機に一度正規労働から降りた女性が、仕事と家庭の事情との両立が可能な仕事として、その後も扶養控除内のできる仕事として、非正規がほとんどの SSWr を選択していることが示唆される。

以上の検討をふまえ、「SSWr を選択する社会福祉士・精神保健福祉士は、仕事と家庭の都合を両立したい女性が多い」という仮説①を立てることとする。

2. 仮説②：「職務内容の魅力」を重視する価値

2 つ目の仮説は価値による説明である。すなわち、「SSWr を選択する社会福祉士・精神保健福祉士は、SSWr の職務内容に魅力を感じている者が多い」である。

鈴木・野尻 (2018) は、教職経験を経て SSWr になった者のエピソードとして、福祉教育に取り組んだ教員時代や大学院での研究を経て「生活歴や家族などによる環境に左右され困難な状況に陥っている子どもたちに、具体的で効果のある支援を成しえるのは福祉の仕事だと感じた」 (野尻 2018)、養護教諭時代に「為す術がなかったことへのもどかしさ」を感じた (井戸川 2018) といったことが述べられている。

こうした異なる職種・専門性への挑戦は、教職経験者に限らない社会福祉士・精神保健福祉士についても同様であると考えられる。第 I 節で述べたように、SSWr 活用事業が拡大するまで、教育委員会や学校を職場とする社会福祉士・精神保健福祉士はほとんど存在しなかった点では、教職経験者と社会福祉士・精神保健福祉士は、共に SSWr の職務内容に魅力を感じて SSWr を選択しているという説明が妥当である¹⁾。

以上の検討をふまえ、「SSWr を選択する社会福祉士・精神保健福祉士は、SSWr の職務内容に魅力を感じている者が多い」という仮説②を立てることとする。

III. 方法

1. 使用するデータ・変数

そこで本論文では、先述の就労状況調査の集計データを用いることとした。就労状況調査は、社会福祉士・介護福祉士・精神保健福祉士の資格登録機関である社会福祉士振興・試験センターが、「平成 20 年度社会福祉士・介護福祉士・精神保健福祉士現況把握調査」をもとに、平成 24 年度から実施した調査であり、平成 24 年度、平成 27 年度に続けて 3 回目となる。令和 2 年度就労状況調査は、公益財団法人社会福祉振興・試験センターの WEB サイトにて集計データが公開されている。本論文ではこのうち介護福祉士を除いた社会福祉士・精神保健福祉士についての集計データを用いる。なお既存のデータの二次分析であるため、筆者が調査協力者に対して直接的な倫理的配慮等を講じる必要はなかった。また集計データであるため、分析によって個人が特定されることはない。

本論文の目的に令和 2 年度就労状況調査が適している理由は 2 つある。第一に、性別・年齢・雇用形態・職種を訊ねているからである。これは、仮説①に対応している。同調査では、性別や年齢に加えて、社会福祉士・精神保健福祉士ともに「あなたの雇用形態を教えてください」の質問に対して「正規職員」・「契約職員（有期労働）」・「パートタイム職員（短時間労働）」・「派遣職員（派遣会社が雇用）」の 4 つの選択肢が設けられている。これらを用いることで、性別・年齢・雇用形態の比較が可能となる。

また表 2 に示したとおり、就労状況調査では職種・職位が訊ねられている。このうち「職位」に該当する「1 経営者」・「2 施設長、事務所管理者」・「3 主任、相談部門の長」ならびに「15 (18) その他」を除いた選択肢の全て（社会福祉士の場合 4~8, 10~14 の 10 職種、精神保健福祉士の場合 4~11, 13~17 の 13 職種）を合成することで、SSWr と他職種を比較することができる。

第二に、離職・入職における理由を訊ねているからである。これは、仮説②に対応している。就労状況調査では「以前の福祉・介護・医療分野の職場を辞めた理由」²⁾、「あなたが現在の職場を選択した理由」といった質問項目に対して、職務内容や労働条件についての選択肢が設けられている。これらの選択肢は、表 3 に示すように「職務内容の課題／魅力」、「労働条件の課題／魅力」、「消極的な理由」、「よりよい仕事の発見」、「その他」に再割り当てすることができる。以上の選択肢の類型を用いることで、SSWr の仕事を選択する人がどのような価値のもとで離職・職場選択を行ったのか（職務内容の魅力をどの程度重視しているのか）を明らかにすることができる。

なお「労働条件の魅力」については、正規雇用と非正規雇用とでは大きく異なる³⁾ため、回答時に想定する「労働条件の魅力」が異なることが想定される。したがって分析では、SSWr の比較対象を「他職種（正規雇用）」と「他職種（非正規雇用）」に分けて検討することとする。また本論文は正規雇用の SSWr と非正規雇用の SSWr との比較が目的ではないため、SSWr については正規・非正規を括って検討する⁴⁾。

表 2 就労状況調査において訊ねられている職種・職位の選択肢（就労状況調査より筆者作成）

	社会福祉士					精神保健福祉士				
	1 正規職員 (有期労働)	2 契約職員 (有期労働)	3 パート 職員(短時 間労働)	4 派遣職員 (派遣会社 が雇用)	有効回答数	1 正規職員 (有期労働)	2 契約職員 (有期労働)	3 パート 職員(短時 間労働)	4 派遣職員 (派遣会社 が雇用)	有効回答数
経営者	1699	32	35	1	1757	635	6	14	0	655
施設長、事務所管理者	7306	278	49	1	7634	2384	106	17	0	2507
主任、相談部門の長	5826	115	36	0	5977	2073	64	14	0	2151
介護支援専門員 (ケアマネジャー)	97.5%	1.9%	0.6%	0.0%	100.0%	96.4%	3.0%	0.7%	0.0%	100.0%
社会復帰調整官	7207	706	788	10	8791	1081	123	116	0	1320
精神保健福祉相談員	-	-	-	-	-	29	2	1	0	32
精神科医療機関に配属さ れる精神保健福祉士	-	-	-	-	-	90.6%	6.3%	3.1%	0.0%	100.0%
地域包括支援センターに 配置される社会福祉士	3363	371	153	3	3890	698	137	130	5	970
障害者相談支援専門員	86.5%	9.5%	3.9%	0.1%	100.0%	72.0%	14.1%	13.4%	0.5%	100.0%
児童自立支援専門員	1810	184	171	1	2166	2491	91	133	0	2715
医療ソーシャルワーカー	83.6%	8.5%	7.9%	0.0%	100.0%	91.7%	3.4%	4.9%	0.0%	100.0%
スクールソーシャルワー カー	127	8	16	0	151	585	60	22	2	669
相談員	84.1%	5.3%	10.6%	0.0%	100.0%	87.4%	9.0%	3.3%	0.3%	100.0%
指導員	7218	278	209	2	7707	1139	87	96	1	1323
介護職員(ホームヘル パー含む)	93.7%	3.6%	2.7%	0.0%	100.0%	86.1%	6.6%	7.3%	0.1%	100.0%
支援員	40	418	189	4	651	40	1	2	0	43
事務職員	6.1%	64.2%	29.0%	0.6%	100.0%	5.5%	64.0%	30.1%	0.3%	100.0%
その他	7638	1599	1054	9	10300	2038	618	430	8	3094
	74.2%	15.5%	10.2%	0.1%	100.0%	65.9%	20.0%	13.9%	0.3%	100.0%
	1915	178	412	1	2506	683	71	179	1	934
	76.4%	7.1%	16.4%	0.0%	100.0%	73.1%	7.6%	19.2%	0.1%	100.0%
	4182	288	1316	47	5813	527	47	186	6	766
	71.9%	4.6%	22.6%	0.8%	100.0%	68.8%	6.1%	24.3%	0.8%	100.0%
	4954	682	960	16	6612	1932	267	453	2	2654
	74.9%	10.3%	14.5%	0.2%	100.0%	72.8%	10.1%	17.1%	0.1%	100.0%
	4803	383	576	14	5776	1081	99	124	9	1313
	83.2%	6.6%	10.0%	0.2%	100.0%	82.3%	7.5%	9.4%	0.7%	100.0%
	5120	1009	1226	42	7397	2008	392	467	11	2878
	69.2%	13.6%	16.6%	0.6%	100.0%	69.8%	13.6%	16.2%	0.4%	100.0%

表 3 離職理由・職場選択理由の選択肢（就労状況調査より筆者作成）

	離職理由	職場選択理由
職務内容の課題／魅力	やりたい仕事ができなかった 職場の雰囲気や人間関係に問題があった 法人・会社の理念や方針に共感できなかった 将来のキャリアアップが見込めなかった	やりたい仕事だった 職場の雰囲気や人間関係が良い 法人・会社の理念や方針に共感した キャリアアップの可能性があった 教育研修や資格取得支援が充実している
労働条件の課題／魅力	給与や賃金の水準に満足できなかった 勤務形態が希望に沿わなかった 副業・兼業ができなかった	給与や賃金の水準に満足できた 勤務形態が希望に沿う 副業・兼業ができる
消極的な理由	心身の健康状態の不調 育児や介護の支援が得られなかった 転居(家族の転勤等を含む) 人員整理・退職勧奨・法人解散等	育児や介護の支援が得られる
よりよい仕事の発見	より魅力的な職場が見つかった	
その他	起業・開業 その他	その他

2. データの制限と活用の意義

ただし、就労状況調査は社会福祉士・精神保健福祉士のみを対象とした横断調査であり、両資格を保有していない SSWr は分析の射程外に置かれる。また、就労状況調査は集計データの公表に止まり、個票データが公開されていないという難点もある。これは、就労状況調査は「厚生労働省が実施する福祉人材確保対策の改善や今後取り組む新たな施策に寄与することを目的」としており、外部研究者の自由な発想に基づく二次分析は目的外となるからだと思される。したがって個票データが公開されていないことから、分析の可能性は初めからかなり制限されている(第 VII 章でも詳述)。

しかしそうした限界があるとはいえども、本論文の目的に照らせば、令和 2 年度就労状況調査は「希少性」と「新規性」の 2 点に活用する意義を見いだすことができる。

「希少性」とは、全ての社会福祉士・精神保健福祉士を対象とした調査であることを指す。就労状況調査は、令和 2 年 8 月末日時点で公益財団法人社会福祉振興・試験センターの登録簿に登録されている全ての者が対象の全数調査である。具体的には表 4 に示すように、SSWr については、社会福祉士：651 名、精神保健福祉士：286 名、他職種については社会福祉士：53,658 名、精神保健福祉士 18,062 名から回答が得られている。社会福祉士・精神保健福祉士の中では 1% 程度にしか満たない SSWr⁵⁾ についても十分な回答数を有しながらも、他職種に就いている社会福祉士・精神保健福祉士とも比較が可能となっている大規模データである。これだけ大規模な

表 4 SSWr 就業者数、性別・雇用形態の別（就労状況調査より筆者作成）

	男					女					他職種
	正規		非正規		総計	正規		非正規		総計	
	人数	割合	人数	割合		人数	割合	人数	割合		
社会福祉士	20代以下	0	0.0%	11	22.0%	4	8.0%	35	70.0%	50	100.0%
	30代	7	6.9%	11	10.8%	4	3.9%	80	78.4%	102	100.0%
	40代	2	1.1%	16	9.1%	7	4.0%	150	85.7%	175	100.0%
	50代	3	1.8%	15	8.8%	8	4.7%	145	84.8%	171	100.0%
	60代以上	1	0.7%	43	28.1%	4	2.6%	105	68.6%	153	100.0%
	計	13	2.0%	96	14.7%	27	4.1%	515	79.1%	651	100.0%
精神保健福祉士	20代以下	0	0.0%	1	6.7%	1	6.7%	13	86.7%	15	100.0%
	30代	1	0.9%	9	16.7%	3	5.6%	41	75.9%	54	100.0%
	40代	0	0.0%	7	9.0%	3	3.8%	68	87.2%	78	100.0%
	50代	1	1.4%	3	4.2%	4	5.6%	63	88.7%	71	100.0%
	60代以上	0	0.0%	8	11.8%	3	4.4%	57	83.2%	68	100.0%
	計	2	0.7%	28	9.8%	14	4.9%	242	84.6%	286	100.0%

データは他に類を見ず、十分な希少性を有しているといえる。2020 年段階で、SSWr の社会福祉士保有率は 63.6%，精神保健福祉士の保有率は 32.9%である（文部科学省初等中等教育局児童生徒課 2022）が、これらの保有率は増加傾向にあり、将来的には本データの分析がより多くの SSWr について該当するという可能性を秘めているといえる。

「新規性」とは、過去の同調査と比べて 2 つの変更があり、公益財団法人社会福祉振興・試験センターに関わらない研究者による SSWr についての分析可能性が広がったことを指す。前回の平成 27 年度就労状況調査では、「主な仕事（職種・職位）」の中に SSWr が含まれていなかった。SSWr として働いている者は、社会福祉士・精神保健福祉士ともに「その他」の内数⁶⁾で予測するしかなかった。これに対して令和 2 年度調査では、現在の職種の選択肢として初めて SSWr が独立して設けられ、SSWr と他職種の比較が可能になった。

また前回の平成 27 年度就労状況調査では、報告書において各質問の単純集計が公開されるにとどまっており、職種ごとにどのような違いがあるのかがわかるクロス表は掲載されていなかった。これに対して令和 2 年度就労状況調査は、職種ごとのクロス表が公開された。以上の変更は、これまでは不可能であった外部研究者による SSWr についての分析が可能になったという点で、十分な新規性を有しているといえる。

IV. 結果

1. 仮説①の検証

まず、仮説①「SSWr を選択する社会福祉士・精神保健福祉士は、仕事と家庭の都合とを両立したい女性が多い」を検証する。表 5 は、全雇用形態における性別・年齢と職業選択の関連である。社会福祉士では、性別と年齢は職業選択と関連を示さない。唯一、統制変数に性別を入れた場合、男性のみ年齢と職業に弱い関連 (0.10) を示しているが、女性と職業選択の間が非常に弱い関連 (0.07) であることを鑑みると、性別と年齢の間で交互作用効果が生じているからであると考えられる。

一方精神保健福祉士では、女性のみ年齢と職業選択に関連 (0.27) が示されている。すなわち、女性の場合、年齢帯が上がるほど SSWr を選択しているといえる。

なお SSWr のほとんどが非正規雇用であることに鑑み、同様の分析を非正規雇用に絞り込ん

表 5 全雇用形態における性別・年齢と職業選択の関連（筆者作成）

	(統制変数)	独立変数	従属変数	χ^2	CramerV
社会福祉士		性別	年齢	511.11 ***	0.10
		性別	職業選択 (SSWr・他職種)	42.25 ***	0.02
		年齢	職業選択 (SSWr・他職種)	280.41 ***	0.07
	性別：男性	年齢	職業選択 (SSWr・他職種)	145.01 ***	0.10
	性別：女性	年齢	職業選択 (SSWr・他職種)	195.11 ***	0.07
精神保健福祉士		性別	年齢	197.17 ***	0.10
		性別	職業選択 (SSWr・他職種)	36.81 ***	0.04
		年齢	職業選択 (SSWr・他職種)	87.19 ***	0.07
	性別：男性	年齢	職業選択 (SSWr・他職種)	10.52 **	0.00
	性別：女性	年齢	職業選択 (SSWr・他職種)	1363.37 ***	0.27

*** p<0.01 ** p<0.05

表 6 非正規雇用内における性別・年齢と職業選択の関連（筆者作成）

	(統制変数)	独立変数	従属変数	χ^2	CramerV
社会福祉士		性別	年齢	641.6 ***	0.24
		性別	職業選択 (SSWr・他職種)	0.45	0.01
		年齢	職業選択 (SSWr・他職種)	32.45 ***	0.05
	性別：男性	年齢	職業選択 (SSWr・他職種)	10.57 **	0.08
	性別：女性	年齢	職業選択 (SSWr・他職種)	31.8 ***	0.06
精神保健福祉士		性別	年齢	117.01 ***	0.17
		性別	職業選択 (SSWr・他職種)	5.41 **	0.04
		年齢	職業選択 (SSWr・他職種)	12.93 **	0.05
	性別：男性	年齢	職業選択 (SSWr・他職種)	18.82 ***	0.17
	性別：女性	年齢	職業選択 (SSWr・他職種)	8.12 **	0.05

*** p<0.01 ** p<0.05

表 7 性別・年齢と雇用形態の関連（筆者作成）

	(統制変数)	独立変数	従属変数	χ^2	CramerV
社会福祉士		性別	年齢	511.11 ***	0.10
		性別	雇用形態 (正規・非正規)	1219.34 ***	0.15
		年齢	雇用形態 (正規・非正規)	32355.35 ***	0.77
	性別：男性	年齢	雇用形態 (正規・非正規)	3088.93 ***	0.45
	性別：女性	年齢	雇用形態 (正規・非正規)	39020.03 ***	1.00
精神保健福祉士		性別	年齢	197.17 ***	0.01
		性別	雇用形態 (正規・非正規)	301.74 ***	0.15
		年齢	雇用形態 (正規・非正規)	3093.14 ***	0.41
	性別：男性	年齢	雇用形態 (正規・非正規)	1319.5 ***	0.52
	性別：女性	年齢	雇用形態 (正規・非正規)	2123.05 ***	0.39

*** p<0.01

で検討したのが表 6 である。社会福祉士の場合、非正規雇用同士で比較したとしても、性別や年齢は職業選択とほとんど関連がない。

一方精神保健福祉士の場合、統制変数に性別を入れた場合、男性のみ年齢と職業選択に弱い関連 (0.17) を示している。これも表 5 の社会福祉士と同様に、女性と職業選択の間が非常に弱い関連 (0.05) であることに鑑みると、性別と年齢の間で交互作用効果が生じているからであると考えられる。また全雇用形態の場合に、女性のみ年齢と職業選択の間に関連 (0.27) があつたにもかかわらず、非正規雇用に絞り込むと非常に弱い関連 (0.05) となるということは、表 5 の結果は、年齢・性別だけではなく雇用形態についても交互作用が生じた結果、有意な関連が示され

たと解釈できる。

このように、属性と職業選択にほとんど関連はないが、表4に示したとおり、SSWrを選択している社会福祉士・精神保健福祉士に30代以降の女性が多いことは確かである。では、なぜこれほどにまで職業選択と性別や年齢は関係を示さないのだろうか。それを示すのが表7である。表7は、性別・年齢と雇用形態の関連である。社会福祉士では、性別と雇用形態には弱い関連(0.15)が、年齢と雇用形態(0.77)には強い関連がある。また精神保健福祉士でも、性別と雇用形態には弱い関連(0.15)が、年齢と雇用形態には関連(0.41)がある。すなわち、男性よりも女性ほど、また年齢が上がれば上がるほど非正規雇用を選択する傾向となるのである。これを表6の結果と合わせて考えれば、30代以降の女性を選択しているのは「SSWr」という職種というよりも、「非正規雇用」全般であるとわかる。つまり、性別や年齢といった属性は、正規雇用か非正規雇用かといった雇用形態の選択は説明できるが、そこから先の選択、すなわち職業選択は説明できないのである。

2. 仮説②の検証

次に、仮説②「SSWrを選択する社会福祉士・精神保健福祉士は、SSWrの職務内容に魅力を感じている者が多い」を検証する。表8は、SSWrと他職種(正規雇用・非正規雇用)の離職理由を比較したものである。クラメールの連関係数は、正規雇用との比較においては非常に弱い関連しか見られない(ともに0.05)が、非正規雇用との比較においては、社会福祉士・精神保健福祉士ともに弱い関連(0.14, 0.13)を示している。非正規雇用の社会福祉士・精神保健福祉士では、「消極的な理由」を第一の理由として離職する者が約3割強である。

一方でSSWrの場合、「消極的な理由」を第一の理由として離職する者は全体の1割弱にとどまる。社会福祉士では、「よりよい仕事の発見(21.5%)」が他職種の倍以上選択されている。精神保健福祉士では、他職種の倍以上選択されている「よりよい仕事の発見(14.8%)」に加え、「労働条件の課題(17.7%)」も多く選択されている。以上の結果は、SSWrの離職理由の内訳は、消極的な理由よりも、共通して「よりよい仕事の発見」というSSWrの職務内容への魅力というよりポジティブな理由で離職していることを示している。

続いて入職時の職場選択理由を見ていこう。表9は、SSWrと他職種(正規雇用・非正規雇用)の職場選択理由を比較したものである。クラメールの連関係数は、正規雇用の社会福祉士・精神保健福祉士の他職種ならびに非正規雇用の精神保健福祉士の他職種との比較においては非常に弱い関連しか示さないが、非正規雇用の社会福祉士の他職種との比較では弱い関連(0.14)を示している。非正規雇用の社会福祉士のうち、他職種を選択している者は、職場選択第一の理由として「職務内容の魅力(46.8%)」と「労働条件の魅力(44.8%)」を選択している。

これに対してSSWrを選択している者は、第一の理由として「職務内容の魅力(76.3%)」を選択する者が多く、代わって「労働条件の魅力(21.5%)」を選択する者が少ないことから、弱い関連が生じているといえる。なお非正規雇用の精神保健福祉士の場合、他職種においても「職務内容の魅力(76.6%)」で職場を選択する者が多いことから、SSWrに就いている者との間で有意な差が生じなかったと考えられる。以上の結果は、社会福祉士を有するSSWrの職場選択理由の内訳は、非正規雇用の他職種よりも正規雇用の他職種の内訳に類似していることを示している。すなわち、SSWrを選択する者は、たとえ労働条件が非正規雇用の他職種と同様であったと

表 8 SSWr と他職種（正規雇用・非正規雇用）の離職理由の比較（筆者作成）

	職務内容の 課題	労働条件の 課題	消極的な理 由	よりよい仕 事の発見	その他	有効回答数
社会福祉士	スクールソーシャルワーカー	150	58	58	91	67
	他職種 （正規雇用）	35.4%	13.7%	13.7%	21.5%	15.8%
	他職種 （非正規雇用）	8583	3828	4712	2544	2393
	計	38.9%	17.4%	21.4%	11.5%	10.8%
		8733	3886	4770	2635	2460
		38.8%	17.3%	21.2%	11.7%	10.9%
		$\chi^2 = 60.49^{***}, \quad *** p < 0.01$		CramerV = 0.05		
精神保健福祉士	スクールソーシャルワーカー	82	36	28	30	27
	他職種 （正規雇用）	40.4%	17.7%	13.8%	14.8%	13.3%
	他職種 （非正規雇用）	3454	1022	1671	666	730
	計	45.8%	13.5%	22.2%	8.8%	9.7%
		3536	1058	1699	696	757
		34.1%	10.2%	16.4%	6.7%	7.3%
		$\chi^2 = 20.53^{***}, \quad *** p < 0.01$		CramerV = 0.05		
社会福祉士	スクールソーシャルワーカー	150	58	58	91	67
	他職種 （正規雇用）	35.4%	13.7%	13.7%	21.5%	15.8%
	他職種 （非正規雇用）	2311	1096	2236	521	1221
	計	31.3%	14.8%	30.3%	7.1%	16.5%
		2461	1154	2294	612	1288
		31.6%	14.8%	29.5%	7.9%	16.5%
		$\chi^2 = 146.43^{***}, \quad *** p < 0.01$		CramerV = 0.14		
精神保健福祉士	スクールソーシャルワーカー	82	36	28	30	27
	他職種 （正規雇用）	40.4%	17.7%	13.8%	14.8%	13.3%
	他職種 （非正規雇用）	946	295	816	155	407
	計	36.1%	11.3%	31.2%	5.9%	15.5%
		1,028	331	844	185	434
		36.4%	11.7%	29.9%	6.6%	15.4%
		$\chi^2 = 49.84^{***}, \quad *** p < 0.01$		CramerV = 0.13		

表 9 SSWr と他職種（正規雇用・非正規雇用）の職場選択理由の比較（筆者作成）

	職務内容の魅力	労働条件の魅力	その他	有効回答数
社会福祉士	スクールソーシャルワーカー	450	127	13
	他職種 （正規雇用）	76.3%	21.5%	2.2%
	他職種 （非正規雇用）	20949	13716	3966
	計	54.2%	35.5%	10.3%
		21,399	13,843	3979
		54.6%	35.3%	10.1%
		$\chi^2 = 121.17^{***}, \quad *** p < 0.01$		CramerV = 0.06
精神保健福祉士	スクールソーシャルワーカー	212	43	4
	他職種 （正規雇用）	81.9%	16.6%	1.5%
	他職種 （非正規雇用）	20337	7382	2419
	計	67.5%	24.5%	8.0%
		20549	7425	2423
		67.6%	24.4%	8.0%
		$\chi^2 = 27.936^{***}, \quad *** p < 0.01$		CramerV = 0.03
社会福祉士	スクールソーシャルワーカー	450	127	13
	他職種 （正規雇用）	76.3%	21.5%	2.2%
	他職種 （非正規雇用）	4247	4063	763
	計	46.8%	44.8%	8.4%
		4,697	4,190	776
		48.6%	43.4%	8.0%
		$\chi^2 = 194.59^{***}, \quad *** p < 0.01$		CramerV = 0.14
精神保健福祉士	スクールソーシャルワーカー	212	43	4
	他職種 （正規雇用）	81.9%	16.6%	1.5%
	他職種 （非正規雇用）	2615	789	9
	計	76.6%	23.1%	0.3%
		2827	832	13
		77.0%	22.7%	0.4%
		$\chi^2 = 16.52^{***}, \quad *** p < 0.01$		CramerV = 0.07

しても、それらを選択する人の職場選択理由とは内訳が異なり、どちらかというとな正規雇用の他職種の職場選択理由と似た内訳を示しているといえる。

V. まとめ

ここまで、SSWrを選択する社会福祉士・精神保健福祉士にはどのような傾向があるのか、すなわちどのような理由から前職を離職し、SSWrの仕事をどのような理由で選択しているのかについて、2つの仮説に則り検討してきた。属性に着目した仮説①「SSWrを選択する社会福祉士・精神保健福祉士は、仕事と家庭の都合とを両立したい女性が多い」は、部分的に支持された。すなわち、社会福祉士・精神保健福祉士ともに、年齢帯が上がるほど、また女性であると正規雇用よりも非正規雇用を選択していることが明らかになった。しかし、非正規雇用の他職種とSSWrとの間では、性別・年齢と職業選択の関連は非常に弱かった。仮説①を修正すれば、「女性であり、年齢帯が高いほど、非正規雇用を選択する傾向にあり、その背景に仕事と家庭の都合との両立が思量される。しかし、非正規雇用内で他職種ではなくSSWrを選択するかどうかは、性別や年齢との非常に弱い関連しかみられない」となる。

価値に着目した仮説②「SSWrを選択する社会福祉士・精神保健福祉士は、SSWrの職務内容に魅力を感じている者が多い」も、部分的に支持された。非正規雇用の社会福祉士・精神保健福祉士と比較すると、SSWrに就いている人は、他職に比べて「消極的な理由」よりも「よりよい仕事の発見」を第一の離職理由として選択していた。また非正規雇用の社会福祉士と比較すると、SSWrを主たる仕事として選択している人は、他職に比べて「労働条件の魅力」よりも「職務内容の魅力」を第一の職場選択理由として選択していた。以上の特徴は、非正規雇用よりも正規雇用の社会福祉士・精神保健福祉士に類似していた。仮説②を修正すれば、「SSWrを選択する社会福祉士は、SSWrの職務内容に魅力を感じている者が多い。但し精神保健福祉士についてはそのような傾向とは限らない」となる。

VI. 考察

本論文の結果は、SSWrのほとんどは他の非正規雇用と同様の属性を有する者で構成されているという共通性を示しながらも、一方で価値については、非正規雇用の他職種とは異なる、どちらかという正規雇用の他職種に近い内訳で構成されているという、属性と価値の不整合を示すこととなった。表1で示したように、非正規雇用で働く女性の理由には、たとえ男性よりは割合が少ないとはいえ、「専門的な技能等をいかせるから」を選択する者が5.7%といった職務内容を重視する者が一定数存在している。本論文で用いたデータは表1と直接対応しているわけではないが、SSWrという職業は、非正規雇用で働く者には相対的には少ない職務内容を重視する者が多く入職して構成されていると考えられる。

こうした偏在によってSSWrが構成されてきたことを、社会福祉学研究ならびに職能団体は十分に踏まえる必要があるだろう。本論文の知見を前向きに捉えれば、SSWrの職務が、前職の離職やSSWrへの入職をこれほどまでに促す魅力が詰まったものであるといえる。一方で後ろ向きに捉えれば、そうではない者、すなわち消極的な理由での離職者や労働条件を重視する者は、SSWrにおいては少ない、あるいはそもそもSSWrを選択していないといえる。すなわち、職能団体の努力によってこれまで社会福祉士・精神保健福祉士が存在していなかった新しい職域が開拓されたところで、それが非正規労働という相対的に不利な労働条件が多数であれば、その努力は職務内容を重視する者にばかり響くことが示唆される⁷⁾。

VII. 本論文の限界と今後の課題

本論文の主な限界・課題は5点ある。第一に、本論文は就労状況調査の複数年度にわたる個票データを入手することができず、単年度の集計データを二次分析したために分析方法上制約が課されたことである。2018年度のみデータであることから、2008年度以降のSSWrの拡充に伴う社会的注目や労働条件の変化をふまえたSSWrを選択する者の変化には迫ることができなかった。また第III章2節でも触れたように、集約データは最大で三重クロス表であるため、例えば「どのような属性（性別・年齢）を有している者がどのような雇用形態を選択し、どのような価値を有しているのか」といった4つ以上の変数を用いたモデルの構築や、年齢帯ごとの離職・入職理由の検討はできなかった。今後複数年度にわたる就労状況調査の個票データが公開されれば、こうした分析の可能性は広がると考えられる。

第二に、SSWrを選択する過程を描き出すうえで用いることができる変数が限定されていることである。就労状況調査では、SSWrを含む現在の職場を“誰から”知ったのかについてはたずねられていない。したがって「弱い紐帯」理論（Granovetter =1998 : 50-3）に代表される、既存の転職研究の成果を全て反映できたわけではない。また、SSWrを選択することを希望しながらも、採用がなかったり採用から漏れてしまうなどして選択できていない者の意向を分析の対象に含められているわけではない。今後類似の調査を実施する機会に恵まれれば、既存の先行研究の知見を踏まえた調査設計が求められるところである。

第三に、「職務内容の魅力」を感じて入職した人の選択の説明が、価値“観”ではなく価値に止まったことである。本論文では、離職・入職の選択理由の違いを価値として取り扱った。それは、調査票で回答した選択理由が、人生全体の職業選択に共通するその人の「価値観」なのか、あるいは特定の環境下であるSSWr選択時に発露した特有の「価値」なのか判然としなかったからである。したがってSSWrを「職務内容の魅力」で選択した者であっても、過去には「労働条件の魅力」で他職種を選択している可能性がある。今後、どのような価値観を有している者がSSWrを選択するのかに踏み込んで論じるためには、過去の職業選択も分析に含められるような回顧質問の追加やパネルデータの構築が必要である。

第四に、社会福祉士・精神保健福祉士全体の中での比較に焦点を置くがゆえに、どのような属性や経験を有する者が、SSWrの仕事に対してどのような「職務内容の魅力」を有するのかといったSSWr内部での多様性まで明らかにできなかったことである。例えば、子育て経験を有する女性が、自身が味わったような親としての大変さを軽減したいと考える故に「職務内容の魅力」を感じる場合もあれば、過去にハイリスクアプローチに取り組んでいた児童福祉司経験者が、より多くの人に支援を届けるためのポピュレーションアプローチに関心を持った故に「職務内容の魅力」を感じる場合もあるだろう。こうしたSSWr内部での多様性を明らかにするためには、今後SSWrの職を選択した社会福祉士・精神保健福祉士に対するより詳細な調査が求められる。

第五に、SSWr以外の職種について検討できなかったことである。SSWrに着目した本論文は、紙幅の都合上、一括りとした他職種内部の多様性を鑑みることができなかった。今後、社会福祉士・精神保健福祉士の職域内における職種間の多様性を深めることが新たな研究課題として立ち上がったといえる。

付記

本論文は、JSPS 科研費 22K20189 の助成を受けた研究成果の一部です。

注

- 1) なお同書には、SSWr の職に就かないかと誘われたのは教員退職後であること（鈴木 2018）を示すエピソードも所収されている。こうした勧誘の時期は、退職教員と同程度またはそれ以下の不利な労働条件（藤本 2021）となる SSWr への転職が、教員在職中には躊躇われた（あるいは、そもそも転職を誘われなかった）ことを想起させる。ただし、鈴木（2018）自身は収入が下がることへの躊躇いは述べていない。たしかに退職後の SSWr への入職は、不利な労働条件を避けるためかもしれない。しかし、教員経験が直接的に生きる再任用教員ではなく、それとは異なる福祉の専門性が求められる SSWr に挑戦するという職業選択は、不利な労働条件を避けるためという理由だけでは説明がつかないのも確かである。
- 2) SSWr の全国的な活用が 2008 年度から始まったことを鑑みると、事業開始頃から新卒で SSWr として入職した者は 30 代以下であるはずである。しかし表 4 に示したように、回答が得られた SSWr の全人数（937 名）のうち 40 代以上（563 名）が 60% を占めている。つまり、SSWr 入職者の大半は何らかの理由で前職を離職し、転職してきていることが考えられる。したがって「なぜ SSWr を選ぶのか」に直接的に答える職場選択理由だけではなく、多くの者が経験していると考えられる離職理由についても検討する意義は大きいといえる。
- 3) フルタイムの正規雇用とは異なり、契約職員の場合は雇用年数に制限があり、パートタイム職員は勤務時間に制限がある。正規雇用にとっては、「高い給与」や「安定した雇用」に労働条件の魅力を見いだしていると考えられるが、一方で非正規雇用については表 1 に示されたような、「雇用や勤務時間の短さ・柔軟性」に労働条件の魅力を見いだされていると考えられる。
- 4) 3) で述べたように、SSWr についても正規雇用と非正規雇用で異なるところに「労働条件の魅力」を見いだしていると考えられるが、表 4 に示したように、社会福祉士を有している正規雇用の SSWr は 40 名、精神保健福祉士を有している正規雇用の SSWr は 16 名しかない。ここから複数の選択肢に分けて検討を行うと、セル内の数が 5 を下回り、カイ 2 乗検定の結果がうまく出力されなくなってしまう。個票データが存在すればフィッシャーの積率相関係数の計算に替えることができるが、集計データでは不可能である。したがって本論文では SSWr の雇用形態を分けずに取り扱う。
- 5) 「1 経営者」・「2 施設長、事務所管理者」・「3 主任、相談部門の長」といった職位を除くと、SSWr は、社会福祉士の職域の中で 1.2%（SSWr651 名 ÷ 全職種（651 名 + 53,658 名））、精神保健福祉士の職域の中で 1.5%（SSWr286 名 ÷ 全職種（286 名 + 18,062 名））となる。
- 6) この「その他」には、他に「行政機関」・「司法福祉関係」「就業支援関係」も含まれており、SSWr を取り出して他職種と比較することは実質的には困難であった。
- 7) 非常勤 SSWr の労働については、十分な人的資源が投入されていない支援者間で互いのやりがいに頼りながら不払い労働をなんとか担っているやりがい依存にあることが指摘されている（藤本 2023）。本論文の結果は、そうした職責を引き受けられる者が相対的に多く SSWr として入職するという、任用段階からのやりがい依存を示唆する。

引用文献

- 藤本啓寛 (2021) 「スクールソーシャルワーカーとして就職する困難——東京都基礎自治体への調査をもとに」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』28(2), 139–49.
- 藤本啓寛 (2023) 「非常勤スクールソーシャルワーカーのジレンマ——不払い労働に生じるやりがい依存」『学術研究. 人文・社会科学編』71, 83–102.
- Granovetter, M. (1995) *Getting a Job: A Study of Contacts and Careers 2nd ed.*, The University of Chicago Press. (= 1998, 渡辺 深訳『転職 ネットワークとキャリアの研究』ミネルヴァ書房.)
- 保正友子 (2013) 『医療ソーシャルワーカーの成長への道のり——実践能力変容過程に関する質的研究』相川書房.
- 井戸川あけみ (2018) 「地域で子どもの健康を考える」鈴木庸裕・野尻紀恵編著『学校でソーシャルワークをするということ』学事出版, 135–48.
- 岸上真巳 (2021) 「女性にとって『自分の都合のよい』働き方とは何か——「行動」と「解釈」の視点からみる非正規雇用という就業形態の選択理由」『大阪経大論集』72(3), 199–218.
- 公益財団法人社会福祉振興・試験センター (2021) 「令和2年度社会福祉士・介護福祉士・精神保健福祉士就労状況調査結果」(https://www.sssc.or.jp/touroku/results/index_r2.html, 2023.3.20).
- 文部科学省初等中等教育局児童生徒課 (2022) 「スクールソーシャルワーカー活用事業に関するQ & A」(https://warp.ndl.go.jp/collections/content/info:ndljp/pid/12713427/www.mext.go.jp/content/20220203-mxt_jidou02-000008592-2.pdf, 2023.3.20).
- 日本ソーシャルワーク教育学校連盟 (2022) 「2022年度社会福祉士・精神保健福祉士全国統一模擬試験受験者への進路意向等アンケート調査結果」(http://jaswe.jp/researchpaper/20230301moshi_jukensha_report.pdf, 2023.3.20).
- 野尻紀恵 (2018) 「スクールソーシャルワーカーが学校でソーシャルワークを展開できるために」鈴木庸裕・野尻紀恵編著『学校でソーシャルワークをするということ』学事出版, 41–78.
- 白旗希実子 (2015) 「社会福祉士——曖昧な業務からの報酬(職域)確保運動」橋本鉦市編著『専門職の報酬と職域』玉川大学出版部, 235–64.
- 総務省統計局 (2020) 「詳細集計 II-A-第4表 年齢階級, 現職の雇用形態についての主な理由別非正規の職員・従業員数」(<https://www.stat.go.jp/data/roudou/report/2020/index.html>, 2023.3.20).
- 鈴木庸裕・野尻紀恵編著 (2018) 『学校でソーシャルワークをするということ』学事出版.
- 鈴木富成 (2018) 「学校マネジメントを経験した退職教員の視点からみるスクールソーシャルワーク」鈴木庸裕・野尻紀恵編著『学校でソーシャルワークをするということ』学事出版, 177–90.
- 山野則子 (2012) 「スクールソーシャルワーカー配置プログラムに関する研究」白澤雅和『平成23年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(A))研究報告書 ソーシャルワークの評価方法と評価マニュアル作成に関する研究 第二報』38–91.
- 義基祐正 (2022) 「社会福祉労働論の歴史的成果と今日の課題」社会事業史学会創立50周年記念論文集刊行委員会『戦後社会福祉の歴史研究と方法——継承・展開・創造 第2巻』近現代資料刊行会, 251–76.

Trends in Certified Social Workers and Mental Health Social Workers Choosing to be School Social Worker: Cross-Sectional Analysis of Attributes and Values Using the Survey of Employment Status

Takahiro FUJIMOTO

This paper aims to clarify the tendency of certified social workers and mental health social workers who choose SSWr. For this purpose, aggregate data on certified social workers and mental health social workers from the “2020 Survey of Employment Status of Certified Social Workers, Certified Care Workers, and Mental Health Social Workers” conducted by the Japan Center for Social Welfare Promotion and Examination in 2020 were conducted for a secondary analysis. The results revealed that while gender (being female) and older age were associated with the choice of non-regular employment, gender and age were not associated with the choice of SSWr within non-regular employment. For certified social workers only, it was also revealed that the choice of SSWr was due to the attractiveness of the job description compared to other occupations. In sum, the results show the inconsistency that those who choose SSWr have similar attributes to other non-regular employment but have similar value to other occupations in regular employment.

Key Words: Certified social worker, Mental health social worker, Survey of employment status, Non-regular employment, Attractiveness of job descriptions